

# 書かない 小論文指導

## 第1回

# [ 小論文に必要な思考の3段階 ]

AO・推薦指導で実績を残してきた“カンザキメソッド”開発者、神崎史彦氏が、  
実際に行っている授業を基に小論文に必要な思考を身に付ける方法を紹介する新連載。

第1回目は、考え方の基本をお伝えします。

はじめまして。大学受験予備校や私塾、高校で小論文や志望理由書、面接等、総合型・学校推薦型選抜に関わる指導や、「総合的な探究の時間」のコンサルティングを行っている神崎史彦と申します。過去に某大学の入試制度設計に携わった経験もあり、総じて、高大接続の領域で活動しています。

こうした経験を基に、全国の高校の先生方と教育観やノウハウを分かち合う機会に恵まれたことを嬉しく思います。この連載では、私が携わるさまざまな領域の中でも「小論文」に焦点を当てます。なお、指導の実際については次回以降とし、初回は指導の核となる要素を整理するところから始めます。

小論文の核となる要素は根拠(Reason)、意見(Answer)、提案(Proposal)と、それらを導き出す思考フレームです。また、地球に存在する全生命が理想とする姿を想定し、それを妨げる要素を捉え、解決の方向に導く方法を常に念頭に置くことが大切で、それを高校生と共に考えることが使命だと感じながら現場に立っています。

### 小論文における「意見」と「根拠」の関係性

小論文では、出題者から与えられた設問(Question)に対する「意見」を文章で示すことが求められます。つまり、設問に対する意見を述べるという条件付き作文が小論文です。答案を作成する際、

「意見」として可能性のある候補を挙げ、吟味し、最も正当性のあるものを選び(もしくは複数の意見を統合し)、限られた字数の中でそれらを表現します。

ここでは数ある事実を俯瞰して捉えることが必要です。どういう因果関係や相関関係のもとで問題が起こっているのか、微視的な視点だけでなく巨視的な捉え方をします。分析の過程で想定できる数々の意見は、意見を発する人々の立場や価値観と紐づきます。例えば、環境問題は、自然環境保護を含めた自然科学の世界から語る人もいれば、経済・政治・法といった社会科学からのまなざしもあり得るし、文化・芸術といった人文科学的な捉え方もできます。

そうしたさまざまな立場を想定したうえで、自らの意見に責任をもって論じる必要があります。なぜその立場の意見を採用したのか、なぜこの意見が重要だと言えるのか(重要性・問題だと言えるのか(問題性)を考え抜かなければなりません。そのとき必要なのは「これからの未来をどうしたいのか(自らが世界をつくる者である意識)」「自分は何者なのか(自らの才能・価値の自覚)」という軸をもち、判断することです。複数の立場や価値観の取捨選択をする際、自分軸と照らし合わせ、どれが理想の世界に最も近い解なのか、妨げている要素は何なのか、ということを考えるのです。そして、その検討過程を「根拠」として示し、意見に正当性を与えます。

### ● 活用する思考フレーム

思考フレーム	機能	小論文の要素で必要な箇所	学習指導要領との対応	評価できる試験形態
① 知識理解思考	知識を習得し、理解する	根拠(Reason)の中にある事実の認識	知識・技能	一問一答/暗記で対応できる選択式問題
② 論理分析思考	知識を分析し、推論する	意見(Answer)を導いたロジック	思考力・判断力・表現力等	記述式問題
③ 批判創造思考	これまでの知をクリティカルに捉え、統合し、新たな知を創造する	提案(Proposal)	学びに向かう力 人間性等	小論文など多面的評価にかかる試験形態

### ● 小論文の要素

#### 設問(Question)

=出題者が提示した問題

#### ① 根拠(Reason)

=事実+重要性・問題性

#### ② 意見(Answer)

=根拠を基に推論して得た解

#### ③ 提案(Proposal)

=目的(why)+戦略(how)+戦術(what)



### 神崎史彦

1978年生まれ。1996年に法政大学に法学部論文特別入試で合格。在学中より中学生の国語・社会・理科講師を務め、卒業後は大学受験予備校などで小論文の講義や講演を担当する一方、通信添削教材・模擬試験の問題作成者として活動。現在までに21冊の小論文・AO入試関連の学習参考書を出版している。現在は自らの塾を運営しながら、講演や私立学校での講師を務め、論理的思考や探究型キャリアデザインの必要性を広める活動、全国各地の高校教育改革ならびに高大接続事業のコンサルティングを行っている。

## 未来を自らの手でつくる 「提案」の必要性

ここまでの話は、過去に起こった「事実」を基に論理的な分析を行い、根拠と意見を導いています。つまり、過去の情報を材料に、現在の高校生自身の意見を示しているということです。しかし、私の指導では、そこで思考を止めず「これからどうすべきか」という「提案」まで求めます。問題や課題を見つけたならばその発生源を食い止めるための戦略(How)、優れた事例を生む秘訣を見出したならばそれを拡大普及する戦略を考えます。さまざまな立場や価値観を意識しながら、どういつ目的(why)をもって戦略を決定するのかを発散思考で捉え、どの戦略がベストかを検討し、具体的な戦術(What)を検討し、絞り込みます。この一連の流れは、言い換えれば「未来の世界を自らの手でつくること」にほかなりません。

この手続きに必要なのがCritical Thinking(クリティカルシンキング、批判的思考)です。俯瞰してさまざまな立場を捉え、「ほんとうにこれまでの在り方でよかったのか」と別の視点からもその事象を捉え直すのが、批判的思考。これまで検討してきた根拠と意見を振り返り、それを複数の立場や視点からも厳しく確認したうえで、問題や課題をどう克服するか、よりよい世界をつくるにはどうするのか、その方針を具体化するならばどうするのか、考え抜くことが大切です。

### ブルームのタクソノミーを踏まえて 整理した思考の3段階

以上のように小論文に必要なのは「根拠」「意見」「提案」の3要素であり、生徒にはこの3点をすべて盛り込むことを求めています。それはもともと大学入試攻略の戦略上、考えた末の判断でした。

私は教育心理学者であるベンジャミン・サミュエル・ブルーム(1913-1999)が提唱した「タクソノミー(教育目標の分類学)」をベースに、高校生が小論文を執筆するときに働かせる思考を捉え直し、指導に活かしています(右下図)。

その捉え方が思考の3段階です。まずは「知識理解思考」。知識をインプットし、そのまま再現する思考の段階です。入試でいえば、一問一答や暗記で対応できる選択式問題です。二つ目は「論理分析思考」。知識を分析し、それらを基に応用・推論する段階です。入試なら、記述

式問題。

ここまでは「過去」に蓄積された知識を基に推論したにすぎませんが、それらをクリティカルに捉え、統合し、新たな知識を創造する思考が「批判創造思考」です。眼差しは「未来」にあります。この領域を評価できるのは、小論文をはじめとした多面的評価にかかる試験形態です。

大学入試という側面で小論文を捉えた場合、大学側のアドミッション・ポリシーを踏まえないければなりません。各大学が「知識理解思考」「知識・技能」「論理分析思考」「思考力・判断力・表現力」「批判創造思考」「学びに向かう力」のどれを重視しているのかによって、本来は対応を変えなければならないということになります。しかし、設問に誠実に向き合うにはこの3つを統合する必要があるのは自明です。知識だけでも、論理性だけでも、理想だけでも足りません。よって、3つの思考をいずれも高める指導を行う必要性に迫られます。

### 現状の小論文指導を 乗り越えるために

実際の高校現場を見続けていると、3つの思考を共に高める指導はあまりないと感じています。よくあるのが「問題演習」と「添削」という方法ですが、文章表現指導に終始したり、ネガティブな枝葉の指摘によって、生徒が個性ある世界観を構築するまでに至らない、思考のためのフォームの習得を意識した指導とは言

い難いものです。結局、高校生たちは指摘を直すだけで、その指導の本質をメタ認知して次の答案へ生かすには至りにくいものです。

また「こういう問題のときはこう書きなさい」と指南するケースもあります。これは本来育成すべき「論理分析思考」「批判創造思考」をすべて「知識理解思考」で処理をするという指導法です。

どちらも、本来必要となる3つの思考をどう鍛えるかというところがデザインされておらず、成長できるかどうかは高校生次第、という指導形態であるということとは否めません。

私は3つの思考を育成する講義をさまざまな高校で展開していますが、小論文なのに授業中に答案を書きません。宿題として問題演習を課し、そこに至る思考のためのトレーニングをPBL(Project Based Learning)によって学ばすスタイルです。つまり、集団でないと学べないことを教室で、一人でできることは授業外でやる、ということです。

この連載では授業の展開だけでなく、授業内のアクティビティの意図などを、背景となる学習理論を交えて紹介しています。今回のテーマは「意見と理由」を予定しています。私も全国の先生方と同様、試行錯誤しながら授業をしています。そうした先生方の励みになるよう、そして私の小論文指導のエッセンスをシェアすることで、より多くの先生方と「仲間」になればと願っています。